芸振

大分県芸術文化振興会議会報

No.52　56・9

発行人・挾間正年　編集人・原尻　実

もくじ

大分の土壌と芸術文化……1
特集―美しい大分―民謡……2
特集―美しい大分―音楽協会・県民オペラ…3
特集―美しい大分―吹奏楽・邦楽……4
提言、宮瀬香多士・会員のこえ、尾登一信…5
県内の文化施設、県立芸術会館……6
市町村文化活動、宇佐市文化協会……7
大分県演劇のあゆみ(1)・文化ニュース……8

大分の土壌と芸術文化

立　川　清　登

私が今、改めて言う迄もなく、大分という地は、大友宗麟公のその昔より、文化・芸術の土壌は培われていたわけで、これ迄にも素晴らしい多くの芸術家、文化人を排出している事でも、自ら証明されるところであろう。

「芸術」と、一口に簡単に言えるこの言葉も、それを語るとなると、そう簡単にいくものではない。しかし、私はむしろ「芸術」という、語感からくる難しさのようなものを恐れるのだ。

確かにそれは、凡人の測り知れない次元の異なったものであるには違いないが、「これは芸術術だ」「俺は芸術家だ」と、一人で叫んでみても、つまるところ、大衆の支持がなければ全くの空念仏、「自慢高慢馬鹿のうち」と、見下げられるのがオチであろう。そんな意味では、芸術だけに限った事ではないが、やはり、大衆の評価なくして、存在し得ないものである。又、そう簡単に「芸術」と、口に出来るものでもなかろう。だからこそ、私達がそういうものに触れた時、一つの感動となって心の中に居坐り、動かなくなってしまうのである。

誰しも始めから「芸術を生み出そう…」などと思って、取り組むわけではない。一人の人間が、或いは何人かの人達が作り、創造されたものが、いつしか大衆の認めるところとなり、芸術の香りを放っていくわけで、その努力も並大抵のものではないであろうし、それだけに、大衆の支持も、より強く大きなものとなってくるわけである。それは唯単なる、一時的なものでは勿論ない。いつの時代にも通じる、永久不変のものであるはずだ。

大分には、その芸術の生まれる土壌があるのだ。何と素晴らしい事ではないだろうか。ヨーロッパへ行って、大変羨ましく思う事は、その芸術が、伝統と歴史の中から現実のものとなって脈打ち、それを人々が大事に育てている事であろう。

大分に、これから必要な事は、正にこの事である。「芸術など縁なきもの」と、ソッポを向く前に、もっと身近なものとして捕え、育てていく。これが又、これからの大分を変え、別な意味で発展、より豊かなものへと転化出来る事になるのではと、思うのだが…。　（声楽家）

宮崎　豊（一水会）

特集 ―美しい大分― 音楽をとおして・・・・・

地方の時代といわれる今、〝美しい大分〟という共通のテーマで、大分における芸術文化をそれぞれの分野から、みなおしてみよう……ということで特集ページを設定いたしました。豊かな自然と、歴史的な文化遺産にめぐまれた〝美しい大分〟／ふるさとをうたい、ふるさとを描き、ふるさとを踊る……その「土着性」にはぐくまれた心と魂は、大分における芸術文化の活動の中に、力強いエネルギーとなって開花されるであろう。――それぞれのジャンルから、その活動状況を通して〝美しい大分〟にせまってもらいました。

開幕行事ふるさとのうた練習風景（合同新聞社提供）

民謡の宝庫大分県

―歌声がこだまする、開幕行事―

<民謡> 加 藤 正 人

郷土伝承民謡の調査研究を開始して、かれこれ30年が経過。この間、農業・水産業・林産業・鉱工業・土木建築・交通に関する作業唄をはじめ、祝い唄・酒宴唄・盆踊唄から祭唄・わらべ唄に至るまでの民謡全領域にわたって、千数百曲を集録・採譜した。この事実から推して大分県こそは、まさしく民謡の一大宝庫だと確信をもって断言できる。

従来、大分県は民謡の貧困なところとされていた。しかし、近ごろでは「関の鯛釣り唄」・「マテツキ唄」・「ケンチャン節」・「五馬の駄賃取り唄」・「豊後追分」等々が全国的に著名となるという躍進ぶり。この情勢で推移すれば、大分県の数々の民謡が、はなやかな脚光を浴びる日の到来も、そう遠い将来のことではあるまい。

複雑多彩な自然が繰り広げる大分県の景観は、「美しい大分」と自讃するにふさわしく、実にすばらしい。そして、その景観にふるさと自慢の民謡の数々が、歌声も高らかにこだまするなら、「美しい大分」は、さらに一段と美しさを増すに違いない。

来る10月1日の県芸術祭開幕行事「ふるさとのうた」公演は、大分県の民謡42曲でつづる唄と踊りの祭典である。思うに、一県の民謡だけで3時間近くにわたる公演がもたれるという趣向は、民謡の宝庫大分県の面目を躍如たらしめる一大快挙ではなかろうか。

ともあれ、これを企画構成した責任者として、ただ今萬謡会の諸氏とともに、はれの舞台で披露される一つ一つの唄に最終段階の磨きをかけている最中である。

「ふるさとのうた」公演が、「美しい大分」に錦上花を添えることができれば、これに越した喜びはない。

（民謡研究家）

特集 ―美しい大分― 音楽をとおして・・・・・

若い指導者層の定着

―音楽協会の二つの行事から―

<音楽協会> 山 本 勝 彦

大分県の音楽実技指導者がこのところ25才～35才の年令層が多くなってきたと思われる。この事について大分県音楽協会の主な行事の二つについて考えてみた。まず一つは大分県新人紹介演奏会であるが、これは音楽大学を卒業した人達に演奏の場を与え、大分県民に紹介する音楽会で、今年で14回目を迎えた。この演奏会に出演した人数は第１回から第14回まで150人を越えている。 これ等の出演した新人の中には現在中央で、また外国で勉強している人もいるが、大半は大分県で演奏活動をし、また指導者として活躍している、もう一つの行事として大分県音楽コンクールがある。このコンクールも本年で第９回目を迎えた。その内容は小学校低学年、高学年、中学校、高校、大学、一般迄、ピアノ、声楽、作曲、管弦と出演部門を広げ、第１回から第９回迄の出演者の数が千数百名にも達した。このコンクールでの第１回高校入賞は現在25～26才になり、また、新人演奏会の第１回目の出演者は現在34～35才になる。このようなことでも解るように音楽協会の活動が着々と出てきている。年々子供達の音楽人口が増える中で、大分県音楽協会として県の文化活動を一層強め定着する意味に於いても今後、協会員相互の研修を推しすすめなければならない。特に小さい時から習っている子供達にとって、我々音楽を指導する側は「医者が命をかけて治療をする」と同じように、正確に、きびしく、子供達の発達を損わないようにしなければならない。

今年も芸術の秋がやって来た。県芸術祭音楽関係だけでも約30の演奏会が２カ月にわたって行なわれる。この演奏会を全部聴くとしても２日に１回は芸術会館、文化会館その他のホールに出かけなければならない。いささか食傷ぎみにならないよう、お互いに努力勉励しなければならない。

（県音楽協会事務局長・芸術祭運営協議会副議長）

美しい郷土〝大分〟

<県民オペラ>

小 長 隆 成

大分県民オペラは、昭和42年の秋、発起人会を開いて本年で15年になります。昔から〝光陰矢の如し〟と言われていますが実感として思われます。その間、64回以上オペラ公演を重ねました。大分の民話を題材にしたオペラ「吉四六昇天」だけでも43回にもなりました。特に皇太子殿下御一家をお迎えしての東京公演、つづいて大阪・福岡公演と、そして遂に本年は中国武漢市・北京市の海外公演を成功させることができました。地方のアマチュアオペラグループとしては画期的な歩みをつづけることができています。これも一重に御支援下さっている多くの県民の皆様方のお蔭であります。郷土大分の風土の中にこうした芸術文化の育つ素地があるのではないかと思います。

かの大友宗麟時代の繁栄の歴史は県民の血の中に消えることなく受継がれていると思われます。それが明治の文明開化時代に福沢諭吉、滝廉太郎、吉丸一昌をはじめ郷土から多くの先覚者を輩出させております。そして現在、清瀬保二、中山悌一、立川清登をはじめ優秀な音楽家が活躍しています。

オペラは昔王侯貴族の庇護のもとに発展したもので、その維持に多額の経費がかかります。現在では世界各国とも国家や自治体が援助するのが通例となっています。大分でオペラが毎年上演できるのは宗麟時代に培われた文化的遺産ではないかと考えられます。

新聞によると大友宗麟を題材にしたプロによる演劇「風光り水澄む郷」が上演されるということですが県民の一人として非常に喜ばしいことであります。今こそディスカバー宗麟のときだと思います。そして人間性豊かな美しい郷土大分が創られることを希っています。

（大分県民オペラ協会事務局長）

特集 ―美しい大分― 音楽をとおして・・・・

美しい県づくりへの一翼を

<吹奏楽> 中野幸和

わが大分県の吹奏楽活動は、質・量共にここ最近高い水準を示し始めたといえる。勿論、基盤が整ったのは今から15年前の昭和41年「大分国体」で、その後47年に「大分県芸術祭」の開幕行事を、また一昨々年の53年には芸術祭の閉幕行事を担当し、ささやかながら大分県の音楽文化振興に寄与できたものと、ひそかに自負しているところである。しかし、全国的に、或いは九州各県の中でみると、他県の隆盛に比べ、やはり水準は上ったとはいえ、九州中位から脱却できていない状況である。もっとも、九州の水準は全国の上位にあるので、九州上位を占めることができれば、全国的にも高い評価を得ることができるものと確信している。しかし、吹奏楽は、ステージでオーケストラの音楽水準を追求するという一面と共に、吹奏楽独自でこの音楽の特性を生かした動的な音楽、言いかえればマーチングや、ドリルという視覚と聴覚に訴える表現が可能で、この面の活動で新しい分野を拡げることができるのである。全国的には10年近い歴史を築いてまとめ上げたマーチングの分野にも、わが大分県は、一昨年の54年に大分で開催された「第3回全国高校総合文化祭」での「別府商業高校」のマーチングバンド活動を起爆剤として、ここ2年ぐらいで、全国的にも高い評価を受けるような「マーチングバンド県」と成った。この活動は、ステージ演奏と併せてのばさなければならないものであるが、この面で吹奏楽に対する県民一般の理解と評価を得て豊かな、美しい県づくりの一翼をにないたいものだと関係者一同張り切っている。

勿論すでに、スポーツ行事や、植樹祭、豊魚祭、農業祭など式典音楽を担当し会の盛り上げにも活動しているので、更に機会あるごとに、これらの活動も積極的に躍進さしていきたいものである。

（県吹奏楽連盟副理事長・県職場音楽連盟理事長）

邦楽と大分県・若人に期待！

<邦楽> 遠藤梢山

昭和30年の春宮城道雄先生が大分に来演し、その帰途高崎山の猿を見物された。珍しい大自然の情景に何か共鳴するものがあったのか、これを作曲したい、と申されたことを思い出す。

「春の海」は、景勝瀬戸内海を題材にした、宮城流独特の味とか、匂いとかに満ちあふれた名曲である。

豊の国と言われる大分の自然・風土はどうであろうか。来県された人々は九重連山や高原の壮大な景色や、耶馬渓の奇勝景観の自然美に魅了されるという。さらに仏の里国東、臼杵の石仏等の古きよき文化遺産も、郷土大分の土の香を漂わす。それだけでなく、滝廉太郎をはじめ中山悌一氏、園田高弘氏、立川清登氏などすばらしい音楽人をはぐくんできた誇るべき風土がある。

こうして見ると、日本の風土と自然美を基にして生まれたとも言える邦楽は大分を舞台にしても、多くの傑作が生まれること必定である。しかし、それには自然の粋のわかる邦楽人が育たねばならない。これからは特に若人に期待するところが大きい。

幸いに県高文連音楽部邦楽班の活動を軸にして、邦楽も各地に広まろうとしている。邦楽愛好者をバックに大いに飛躍発展して欲しいものである。

昨今は素晴らしい音楽を茶の間で楽しめる時代となっているが、芸振の活動と合わせ大分の同志と共に自らの手で邦楽を演奏し、新しい作品の創造にわずかばかりでも寄与することを目標にしたいものである。

（県三曲協会長・都山流尺八楽会県支部長）

提言

ぜひほしい、県立の文書資料館

大分合同新聞文化センター
宮　瀬　香多士

大分県にも、ぼつぼつ文書資料館が必要になってきたのではなかろうか。いまのところ県立大分図書館に府内藩記録や大友文書、稲葉文書、県行政資料などがあるが、これも文書資料館がないから、さしあたって縁が近いということで整理・保存しているのだろう。だが、県立図書館で整理・保存ということはできても、人員やスタッフの面などで、それ以上のことには手がまわらないのが現状だろう。そうなると「利用者があれば、その便に供する」ぐらいしかできなくなる。古文書の内容を解読、分類していくなど、とても出来ないと思う。いま県立図書館にある県行政資料は、明治初期からの約12,600点。県庁舎が出来て移転するとき廃棄処分になるものの中から、県立図書館が重要なものを選んで保存したのが始まり。もちろん、現在も毎年廃棄処分になるものの中から重要なものを選んで保存しているそうだが、スペースの関係で数はしぼられてくるそうだ。

ところで、私なども時折、古いことを調べたいと思うことがあるが、なにしろ古文書が読めない。活字になっていたら助かるがと思うこともある。だが、いまのところ県立図書館の保存史料は活字化する計画はないようだ。だから利用者は「古文書を読める人に限られる」という。もう随分前になるが仕事の関係で県関係の古い文献をあたらなければならないことがあった。幸い活字化されたものが幾つかあったので助かったが、これがなかったら、その企画は日のめをみなかっただろう。もちろん、すでに「大分県史料」など刊行されているが、その後の新史料もだいぶあることだろう。府内藩記録などの古文書も、活字化されれば便利になるのではなかろうか。

また、もう一つあって欲しいものは、県下の郷土史料の目録である。大分県の場合、ご存知のように小藩分立だった。こんな点から史料は各地の図書館や資料館などに分散して保存されていることだろう。そうなると江戸時代の大分県の全体像を描くのは、なかなか難しくなってくる。こういう面でも県立の文書資料館があったらなあと思う。たとえ文書そのものがなくても、せめて所在を示す目録などあれば、研究する人は助かるだろう。もちろん専門家による解読、分類、研究も、こういう施設、機関がなくては進まないだろう。県立の文書資料館の早い実現を望みたいものだ。

（芸振理事）

会員のこえ

もっと会員と密着した組織に…

前芸振事務局長
尾　登　一　信

つい先日まで、芸振会議事務局長として、ドップリと中に浸っておったのが、学校現場に出て、まがりなりにも客観的に芸振を見るようになると、それなりの反省も、期待もある。

一番考えることは、やはり「ひとりよがり」であるということだ。大分県では、各ジャンルの中では、それなりに困難を克服して組織をもち、それがまた芸振の存在意義にもつながっているわけではあるが、まだまだ芸振そのものが会員と密着せず、勝手に歩いているという感じを拭いきれない。

私の学校にも美協の会員、音楽協会の会員がいるけれども、芸振に対する認識はほとんどない。まして高文連関係の職員、生徒においてはなおさらである。

名目共催、後援に名を連ねることも悪くはないが、あらゆる機会、方法でもっともっと啓蒙をしなければならないだろう。「芸振」の部数を飛躍的にふやして、各分野に配るのも一方法ではないか。

芸術文化基金も、今までは何とか順調に募金活動が進んでいるとはいうものの、これはほとんど会長の努力と個人的な知名度でここまで来たといえば過言であろうか。

これからの正念場を迎えて、各理事が一人々々、数十万から百万ぐらいの寄付を集めるくらいの決意と行動が、「芸振」の発展につながるのではなかろうか。

（別府青山高校長）

県内の文化施設

(1) 県立芸術会館

所在地　〒870 大分市大字牧

1　運営の基本方針

(1)　すぐれた芸術作品を紹介する。

(2)　総合文化施設として、芸術文化の創造活動を促す。

(3)　自主的な学習の場を提供する。

(4)　調査研究・情報提供活動を行なう。

(5)　コミュニケーションの場とする。

2　施設の概要

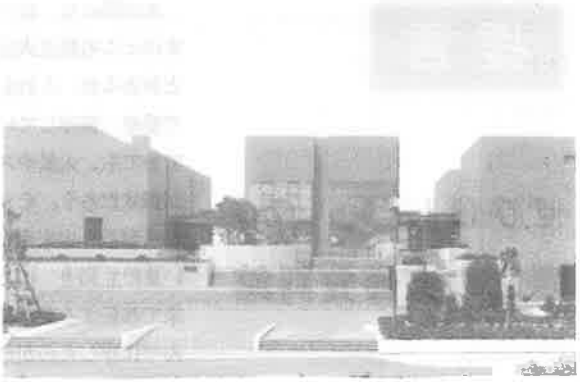
(1)　展示棟は、三つの展示室からなり、災害防止・換気・温度調節等配慮した収蔵庫他を設けている。

(2)　ホール棟には、約千人の客席が設けられ、演技者と観客が一体となって楽しめるよう設計されている。

(3)　管理棟には、講堂・会議室等を設け、芸術・文化団体の研修や自主的活動の場を提供している。

3　事業の概要

(1)　展覧会、国内外のすぐれた作家の展覧会をはじめ、大分県出身作家シリーズとしての「郷土作家シリーズ「大分県在住作家個展シリーズ」及び本県内外在住作家の選抜展である「大分県美術総会選抜展」等を開催している。



(2)　公演、国内外のすぐれた芸術家による公演のほか、個性ある地域文化育成のため「郷土出身音楽家シリーズ」「郷土民俗芸能鑑賞シリーズ」及び演劇創造活動育成の場として「芸館創作実験劇場」、夏季休業中を利用して青少年のための「芸館サマーコンサート」等を実施している。

(3)　調査及び研究、「大分の近世美術（書・画）所在調査」及び「大分県出身作家調査」等をすすめている。また郷土の各種芸術文化団体の活動状況や、伝統的な芸術活動の系統的・総合的調査活動も実施している。

(4)　資料の収集、田能村竹田をはじめ、福田平八郎、朝倉文夫、片田徳郎など大分県を代表する作家の作品を中心に収集している。

4　利用の案内

(1)　利用時間　美術館……9：00～17：00（入場は16：30まで）

文化ホール……9：00～22：00

(2)　休館日　月曜日（祝日の場合は翌日）と年末・年始

（広報普及班主幹　渡辺巌）

おしらせ

シンポジウム大分の文化創造

―ふるさとに若い力を―

県及び大分県教育委員会主催による公開討論会が、左記のような日程で開かれ、広く県民一般の参加を呼びかけています。

最近、大分県内においても、若ものが中心となって、活力ある豊かな地域づくりをめざして、さまざまな、とりくみがなされているが、〃文化の時代〃〃地方の時代〃の名にふさわしい地域づくりの推進には、なお多くの課題が残されています。個性豊かな住みよい地域社会の創造に寄与する文化活動はどうあるべきか。村おこし、ふるさとづくりの運動に〃文化〃はどうとり入れられるべきか、等について、若もの活動を中心としたシンポジウムを開催します。

日時・一一月三〇日（月）（一〇時三〇分～一四時）

場所・県立芸術会館

日程・(1)　開会行事

(2)　記念講演（扇谷正雄）

(3)　アトラクション

(4)　基調講演（草柳大蔵）

(5)　提言

(6)　討論（助言　扇谷正雄・草柳大蔵・平松知事、司会　尾登一信）

(7)　閉会行事

市町村文化活動の現状

歴史的風土にめぐまれ 増々盛大に……

宇佐市文化協会長　岡部忠之

宇佐市文化協会

宇佐文化は宇佐八幡を中心とした、歴史的風土に生まれた特異性ある文化である。500年の歴史を持つ宇佐観世神能は年数回、能舞台で催されます。素謡会、仕舞会、演能会等で出演する者は殆ど会員、時には家元や大師範方の来演もあります。雅楽の伝統もあり、2月に演ぜられます。

今小学生が稽古しています。謡曲師範には無形文化財に指定された先生もいます。準師範の方々も十指に余る程で、謡曲人口は県下第一でしょう。大蔵流狂言の師範も後輩を指導しています。神宮の研究班・史談会班・文化財班等で歴史的研究考察がその基盤になります。全て文化協会員が参加しています。発足以来満9年、80団体の加盟を見て盛大に活動を続けています。正月かるた大会段位認定の家元がいます。県の会は全国的な大会です。神宮献茶会は年1・2回開催、大分県神楽大会は40座位出演します。

箏曲大会には琴・三弦に五師範、尺八には十師範がいます。和楽の隆盛は目を見はる程です。藤間流大会、本年は名取り行事が盛大に行なわれました。その時の写真です。神宮奉賛写生大会、幼・保・小・中・高・一般参加人員千五百余、九州第一の大会、盆踊り大会、マツカセ踊り、出場チーム20組、千名余、口説きは協会募集の作品。10月21日神能風除豊作祈願能大会は毎年定例実施全県的な催し、福岡・松山などの師範の方も参加、12月総合文化祭には全参加、種目の発表会、特別参加は県美展巡回作品展示、市美展大1・小2、詩道会発表会年4回、和歌には勅題選歌者2名が居るので歌集が多数出版されています。俳句はほととぎす同人1名、会は定例或る諸行事の都度行なわれています。

会報「菟狭」年1回発行、総合文芸雑誌「宇佐文学」は年2回、春秋刊行、会直接の予算は会費、市補助金寄付を入れて、総額70万余り、38年文化会館20億円の予算を立てて唯今準備中、いよいよその時、華を咲かせましょう。

（宇佐市社会教育委員）

年一回発行の会報紙

豆知識

アリア　詠唱と訳される。一般的にはオペラ、カンタータ、オラトリオなどの中に現われる旋律的な独唱部分をいう。

コンチェルト　協奏曲。コンチェルトは、「競い合う」という意味のラテン語よりきている。二つの音響体の間の対立・競合を特徴とする楽曲。

三曲　邦楽用語。箏、三味線、尺八（または胡弓）の合奏形態に対する名称。

ソナタ　奏鳴曲。器楽のための独奏曲または室内楽曲でり、かなり大規模な楽章からなっている。語源は、「楽器で奏する」を意味するイタリア語のソナーレからきている。

パロディ　もじり詩、戯詩などとも呼ばれる文芸上の一形式。他作家のマジメな作品を模倣し、その特色を効果的に生かしながら、嘲笑や風刺化した芸術作品をいう。

ミュージカル　演劇と音楽を融合し、台詞と歌と踊りによって物語を展開させる総合舞台芸術として、アメリカを中心に広く世界的になじまれている演劇形態。

（小学館・万有百科大事典）

れんさい

大分県演劇のあゆみ（その1）

中沢　とおる

「大分演劇今昔」と題して「九州往来」という小雑誌に、県演劇史の概略を書いたことがある（五二年七月）。演劇に関しては、その種のまとめが現在までおこなわれていない。充分な資料の整備がないままにお引受したので、私を中心にしたものに偏ると思うが御寛容を乞う。八回連載とのことなので、事実の経過を追いながら、終末でいくらかの意見を述べることにしたい。

演劇は一般的に、日本の場合、田楽から猿楽、そして能・狂言に発展し舞台形象化が完成されたといわれる。

田楽は稲の生産と結合してうまれた民衆の農耕文化であり、猿楽は、それを一つの職業として街道で生きていこうとした、田楽の発展としての民衆娯楽文化であった。室町文化の中で下層民の手でつくられ維持された演劇の原初的素型が、豊前豊後ではどのような型態をとったのか残念ながら不明である。「大友宗麟」を舞台化するとき（昭四九・一一）渡辺澄夫大分大名誉教授にお尋ねしたが、中世の民衆文化史の調査が、大分では欠落している。判然としないが、中央（京都）庶民文化の影響は少ないようだ、というお話しであった。

中津市に重要文化財の「傀儡」がある。「傀儡」は民衆の生産と娯楽とに深い関係をもつ操り人形で、神前にも捧げられたし、くぐつめ（女）は「傀儡」を操つりながら今様を歌い売春もしながら生きたという。「傀儡」の裏側には熱い民衆の吐息があるように思われる。その意味で、大分の各地に転在する神楽の伝統も調査整理されていい。神楽は平安時代に神に捧げる舞楽として形成され、関東と関西では違った有様（関東はせりふなし）をもちながら、生産と神をつなぐ重要な位置をもって民衆の中に生きつづけてきた。

中世末、「大友宗麟」の時代、西洋文化のメッカとなった府内の教会で「ソロモンの裁判」という西洋劇が上演されている。故上田保先生からお借りした木村毅の著書に明白に記述されている。これは「実母・まま母」の詮議として大岡政談に語り伝えられているが、これに類した話が多いとしても調査整理の必要はある。

江戸時代、農閑漁閑期におこなわれた旦那歌舞伎は、国見町、庄内町、臼杵湾岸の漁村などで民衆生活の中に生きつづけてきた。ギリシャ古典劇に始まる西洋演劇史を学びながら、郷土の演劇楽型史をまとめる必要をかんじている昨今である。（県民演劇制作委員長・芸振理事）

文化ニュース

◆日本の代表的ピアニスト、園田高弘氏、芸術院会員顕彰記念祝賀会……10月12日（月）AM11：00西鉄グランドホテル・会費5,000円（申込　別府市上原町２―25、山本勝彦氏宛ＴＥＬ　33―1627）

◆大分芸術会館

・カナダ美術展　10月１日～10月28日

・尾高忠明と東京フィルハーモニー　10月28日

・辛島輝治ピアノリサイタル　11月25日

・第17回県美術展　11月３日～11月22日

◆中津文化会館

文化庁移動芸術祭「牧阿佐美バレエ」公演　11月17日

◆佐伯文化会館

文化庁移動芸術祭「松竹歌舞伎」公演　11月16日

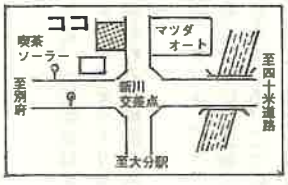
◆大分文化会館「風光り水澄む郷」　10月３日

メーカーでしか出来ない

見て、聴いて選べる大量展示場

カワイ大分ピアノセンター

（新川ソーラー喫茶横）　TEL　33―1696



グランドピアノ
アプライトピアノ

大量展示　50台

★調律修理工場
★駐車場完備

編集後記

52号から、全体的な編集計画に添って編集することにした。２～４ページを特集とし、各部門毎に、〝美しい大分〟の共通テーマで書いていただく考えである。

巻頭言は「県外の人にも」との声があるので、今回は立川清登氏にお願いしたら、心よくお引き受けいただき喜んでいる。５ページは提言、会員の声として、芸振の方向や問題点にふれていただきたいと思っている。

６、７ページはシリーズもので、各地の施設や活動を紹介して行く予定である。最後のページに、〝大分県演劇のあゆみ〟を８回のれんさいで続ける予定である。忙しい中、原稿をお寄せいただいた方々に深くお礼申し上げます。（T）

発行所・大分市府内町県教育庁文化課内県芸術文化振興会議事務局・印刷大分プリント社・題字野田南圃